

～well-beingへの道～

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail: fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

第6期

『評議員選挙』

がおこなわれます。



『評議員選挙—新体制が 求められるもの』

会長 河東田博

日本福祉文化学会では2年に1度の評議員選挙の年を迎えます。会員の皆さまから積極的な選挙の参加にご協力いただき、本会の更なる発展を一緒に考える人選をしていただければ幸いです。

選挙のスケジュールは左記の通りです。

- 4月 選挙人名簿を全会員に送付、評議員投票開始
 - 5月 投票締め切り・開票
 - 7月 新評議員の選任
 - 9月 新評議員候補者顔合わせ
 - 10月 理事会・評議委員会で選出。会員総会で承認
- 平成27年
4月 新体制でスタート

一番ヶ瀬元会長のカリスマ性にすがりながら維持されてきた日本福祉文化学会は、元会長のご逝去により大きな岐路に立たされてきた。元会長と共に歩んで来られた方々が大量に学会を去られたからである。しかし、多くの会員の支えや努力により、大幅な会員減は何とか食い止めることができた。新体制には、今後、会員増を念頭に入れた魅力ある学会作りが求められていく。

⑥ 将来構想の明確化、などの取り組みを行ってきた。こうした取り組みを具体化するために、各種委員会を含めた横断的な検討の機会を設けたり、特別委員会を設置するなどして対処してきた。現在は震災関係の取り組みを加えて、継続した努力が続けられてきている。新体制では、こうした様々な取り組みの深化・発展が求められるべくしていくことになる。

また、研究委員会主催の「福祉文化よもやまゼミナール」の中から新しい提案が出されてきている。蘭田顧問から、これまで私たちは、「福祉文化」という概念を曖昧なままに無批判に受け入れ、「福祉文化」概念に閉じこもって文化の多義性

現在の役員構成は左記のようになっています。(順不同敬称略)

- 会長 河東田博
副会長 石田 易司、島田 治子
顧問 蘭田 碩哉
理事 (19名) 越前谷 賢一、大澤 澄男、石井 パークマン麻子、梅津 迪子、平田 厚、岡村 ヒロ子、和泉 とみ代、川田 美由紀、雨宮 洋子、馬場 清、國光 登志子、多田 千尋、マーレー 寛子、稲田 泰紀、遠藤 美貴、安倍 大輔、木村 たき子、渡邊 豊、磯部 幸子
評議員 (8名) 沈 潔、厚美 薫、天野 勤、池 良弘、浮田 千枝子、加登田 恵子、小沼 肇、佐々木 隆夫
監事 齋藤 孝夫、前嶋 元

日本福祉文化学会 ブロック・委員会

活動 報告

●北陸ブロック

現場 セミナー 報告

石井
パークマン
摩子

2013年11月2日(土)、3日(日)に「障がいのある人の生きがいを支えるコミュニティ」地産地消の食事づくりの実践から」をテーマとし、福井県鯖江市で現場セミナーを開催した。セミナーには障がいのある方本人やご家族、就労・福祉施設職員、特別支援学校教諭、ボランティア活動従事者、市議会議員、一般の方等68名が参加した。セミナーでは障がいのある人の仕事の場合を創出した好事例として、福井県鯖江市のNPO法人・小さな種こころの「食事づくり」の取組を理事長の清水孝次さんにお話しいただき、次に福井大学障害者就労支援室のアドバイザ伊藤昭彦さんに活動報告をお願いした。その後石井パークマンから、1980年代のスウェーデンでの「障がい者が地域で生きる」と



現場セミナーの様子

いう大きな政策転換の中でスタートした知的障がい者と職員による、おそらくは世界初のレストランの成立と活動の展開を、当時の歴史的な背景を踏まえて報告をした。報告後の会場との意見交換は活発に行われ、30名の方からアンケート回答が集まった。2日目はNPO法人・小さな種こころのファームを訪問し、しいただけ栽培や野菜作りの実際を見学した。

●中部東海ブロック

公開型 研修会 報告

平田
厚

「家庭・家族とつながる」近所の再構築の決め手は「一体何か」をテーマに「公開型研修会」を展開―若者の地域デビューと社会教育と社会福祉の融合に取り組み―静岡福祉文化を考える会活動を通じて、中部東海ブロック活動に取り組んできたが、長寿者を地域や家庭で孤立させないためには、専門領域の関係機関・団体や特定市民の関係者中心とした研修の機会を設けるだけではなく、専門性と市民性を融合した市民参加・公開型研修プログラムを開催し、いかにして「わかる福祉」そして「見える福祉」による学びの場必要かを課題に「調査研究事業」「実践活動事業」「啓発学習事業」の3つの事業に精力的にとりくんだ。

中でも「若者の存在と地域参加

をいかにして提供できるか」「福祉問題を単に福祉領域だけで解決していくとする地域社会を改善することが出来るか、社会教育と社会福祉の融合を課題提起とする」「ご近所福祉を通じて、コミュニティ機能の中に地域住民が行き来できる居場所(社会資源の発見と有効活用)」「地域住民一人一人の地域の担い手としての出番を考える」等の学習テーマを展開した。今年度は777名の方が参加して5回の「公開型研修会」を開催した。

●関西ブロック

現場 セミナー 報告

岡村ヒロ子

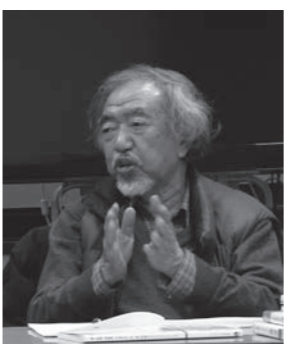
昨年11月23日、近江八幡の社会福祉法人小羊会「デイサービスむべの里」を訪問し、現場セミナーを①デイサービスでのレクリエーション②実践報告(施設長マレー寛子会員「むべの里の取り組みと地域における役割」、富澤公子会員「奄美群島からみる長寿と幸せな老い」)の内容で開催した。①では、習字・健康体操・音楽から1つ選び、参加した。見事な腕前の習字、広告で作ったお手製の棒を使った青空のもとの健康体操、発表会のリハーサルを披露したトーンチャイム演奏。石田

研究 委員会 報告

馬場
清

大分大会での報告を目指して

研究委員会では、昨年9月の東京大会において「福祉文化研究のねらいと方法」と題した報告を蘭田碩哉顧問よりしていただき、「文化」の4つの視座からみた福祉文化研究のあり方について討議を行った。



今後のあり方を語る蘭田顧問

今後はこの方向性

を引き継いで、大分大会において何らかの報告ができるように「福祉文化よもやまゼミナール」を開催していく予定である。まずは手始めに3月2日(日)、新たなメンバーも加わって、今後の方向性について検討した。その結果、これまでの『福祉文化研究』掲載論文を「4つの視座」から分析、福祉文化研究のあり方を考えるとともに、ニューtralルで使いやすい定義の提案及び論文査読にあたってのガイドライン作りを考えていくこと、またゼミメンバーによる福祉文化研究のモデル研究になるような論文、レポートの提示を行うことなどを盛り込んだ報告書を2014年度末に向けて進めていくことを確認した。



よもやまゼミナールの様子

来年度、大分で行われる学会大会への参加を韓国の大学院生に対して呼び掛けた。今後このような地道な交流が継続できるよう働きかけていきたい。今後、学会としてどのような国際交流を持っていきたいかを理事会を中心に検討していきたい。

災害と 福祉文化 委員会

石田
易司

2012年と2013年9月に現場セミナーを開催した気仙沼大島は、生計の中心であった魚介類へ

のダメージがあり、いまだに行きつ戻りつの復興状況にある。島民の疲労感時間は時間を追うことに深まるばかり。その状況を改善するために、2014年1月、島田治子会員ら7人の発起人により「気仙沼大島キラキラ母ちゃんズ」を立ち上げ、島で採れる柚子を中心に、大島ならではの食べ物や製造・販売することで、大島の活性化を図ろうとしている。2014年4月20日(日)に大島で開かれる「つばきマラソン」で「キラキラ母ちゃんズ」は食べ物販売を行い、イベントを支援するとともに、資金づくりをする予定。また、関西ブロックの長尾玲子会員が、2013年末から島の女性を

対象にキルト教室を始めておられ、2か月に1回程度開催予定。石田易司会員は5、6、7、8月と12月に実施した子ども達とのふれあい活動を今年度も計画。今年はこのように会員が気仙沼大島という場合と、自分の活動を融合させる形で、被災者支援活動を展開する予定。できれば、現場セミナーも気仙沼大島と飯館村で実施したい。日程が明確になれば、皆さんにも連絡したいと思っているので、ふってご参加ください。

広報 委員会 報告

稲田
泰紀

今年度も会員皆さまからのご協力により福祉文化通信(年3回)の発行及び学会のホームページ運用など広報活動を行ってきました。また、他学会などの情報連携や講座案内などもホームページ上で実施いたしました。

次年度には、それぞれ地域の特色ある活動を実施しているブロック会員の皆さまとの情報連携を更に進めるべく、希望される方へ「ブロックメーリングリスト」の設置を行います。希望される方は4月に事務局からの登録希望とりまとめ(仮称)用紙をお届けしますので記入し事務局まで返信お願いいたします。

国際交流 委員会 報告

マレー
寛子

今年度は、昨年2月に行われた

韓国での国際現場セミナーで培った交流を、関西中心に継続することに重点を置いた。国際現場セミナーの時、現地で活躍してくれた日本の大学に留学している学生たちと研究会を通して交流を重ねた。また、韓国の大学からは、夏と冬2回に渡って教授陣や大学院生が来日された。今年2月に来日された時には、大阪で関西ブロックのメンバーを中心に懇親会が催された。昨年の国際現場セミナーの参加者にもお声をかけたところ、関東からも参加され賑やかな交流の会を持つことが出来た。また、



韓国の研究者たちとの交流会

2013年度

第3回理事会報告

2014年1月25日(土)午後1時30分から理事会が開催されました。今回の最大の議題は2014年度に行われる第6期日本福祉文化学会の役員選挙に関するスケジュールと選挙管理委員等の選任でした。

選挙管理委員には三岳貴彦氏および松原徳和氏を選任。また立会人には善本真弓氏と大江緑氏が承認されました。

4月半ばに皆さまのお手元に選挙に関する書類をお届けいたします。5月半ばには開票し、さまざまな調整の後、10月4、5日の第25回全国大会別府大会で新役員体制が決定します。新しい時代の日本福祉文化学会をリードして下さる役員選出にぜひともご協力下さい

いますよう、切にお願い申し上げます。他には2013年度活動報告(「福祉文化研究」23号巻末資料に掲載)と2014年度事業計画の具体的提案などがなされました。

震災支援関係の支援活動では、気仙沼大島において、新たな動き(柚子を使った製品づくり)とキルト教室の定例開催)も始まり、学会としても皆さまに情報を提供しながら支援の輪を広げていく事が承認されました。

また、2014年度からブロックごとのメーリングリストを充実させ、情報を速やかに提供できる環境づくりをすることが決まりました。改めて「会員情報確認」のお願いをお届けしますのでよろしくご協力お願いします。

新・福祉文化シリーズ第五巻

「福祉文化の源流と前進」

(明石書店)

日本福祉文化学会編集委員会編集代表 永山 誠(編)

21世紀になってから10年、日本福祉文化学会が創立20周年を迎えたところで、学会企画の新・福祉文化シリーズ全5巻の刊行が決まりました。すでに刊行は最終場面を迎えね最終巻となるこの第5巻は、福祉文化の理論を扱うことになっていった。経過としては、理事会の議決を経て研究委員会にこの巻の企画がゆだねられた。

研究委員会としては、福祉文化の諸実践の到達点を集約し、あるいはまた理論面の成果を整理すること等の企画

を小坂享子前理事との数度の打ち合わせで考えてきたが、第1巻「福祉文化とは何か」をはじめ既刊とだいぶ重複することがわかった。そこで研究委員会としては重複をできるだけさげながら、福祉文化の理論上のテーマを並べそこからさらにテーマを絞った。

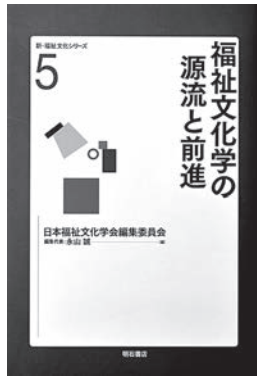
(中 略)

学会は、本来ならば、これらを含むした成果をとりまとめて紹介することが必要である。その意味からいえば、ここでカバーした研究は限定した領域

新規加入者紹介

●2014年2月28日までにご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせいたします。(敬称略) 個人会員…

- 鈴木 尚正(関東)
- 小野寺千鶴(関東)
- 脇屋 和美(北陸)
- 今井 慶宗(関西)



の限定的視点から取り上げた成果ではないともいえる。限界があるとするれば、ひとえに企画者側の責任である。

しかし、ここ数年における本学会の研究成果を読み取ろうとする場合、フォロワーでできなかったものがあるが、意味のある論文を掲載できたと思う。

(中 略)

「福祉文化」も同じで、福祉文化の運動や実践活動と福祉文化活動とは関心の置きどころが違う場合もあるが、しかし「福祉文化学」は最終的に福祉文化を支え豊かにするとともに、その発展に独自の視点から寄与する関係にある。おそらくこの巻の読者は、福祉文化についての新たな発見があるのではないか。

(本著「読んでいただく前に」から抜粋)

福祉文化の交差点③

「学会員から3回に分けて福祉文化のルーツを考える視点で、ご寄稿いただく新コーナーです」

雑木林の小徑

福祉のフォークロア

斎藤蓬山(群馬県)

柳田國男は、庶民の歴史を掘起す民俗学(郷土研究)の創始者だが、稀代の旅行家でもあった。旅行を通じて、日本民俗学を形成したとも言えよう。

そして、この明治人はひたすら歩き、土地の人から話を引出すこと、彼から学ぶ人への課題を示すこと、もしくは自覚させることにも、とても長じていたようだ。

徳川貴族院議長との確執により官界を去った彼は、『雪国の春』『海南小記』の旅に出る(大正九年)、自身も紀行に残しておきたいのはこの旅だけという長い旅だった。

三陸の唐桑浜では四十戸足らずの地区で二戸だけ残り、あとは悉く流された海嘯の話を聞く、鶴住居の寺には団欒の態を描いた画が掛けられ、それは多く海嘯の犠牲者という。浜の物悲しい盆踊り歌に、「忘れても忘れきれない常の日のさまざまの実験、遣る瀬無い生存の痛苦、どんなに働いてもなほ迫って来る災厄、如何に愛しても忽ち催す別離」の哀しみ、それを想うことのできる旅人だった。

旅は「本を読むのと同じ」であ

り、時間をかけて見てまわり、土地の人々と語合い、予定された行程のさらに向こうにまで自分の足で出かけてみることに、それにより初めて、旅は「世を知り人を知る」ことになっていく。

沖繩の旅で、わたくしたちも「オキナワとヤマト」の視点は求めうる、しかしその時、柳田は同時に「干瀬の人生」である宮古や八重山の人びとへの同情ある眼差しを併せ持っていた。島の人生は、「生きると云ふことは全く大事業だ。あらゆる物が此為には犠牲に供される。しかも人は美しく生きようとする願が常に在る。苦惱せざるを得ないでは無いか。」

わたくしたちは、人と話合い、人と人との関係を整え、互いの持抱く能力を発現させる方法として、「福祉文化」を位置づける。であればこそ、生きた人間の、一回限りの人生の背景と生き様を見出すために「福祉のフォークロア」は必要となる。それは、類としての人間にとっては雑木林の小徑のように、自然と人間との営みの場であり、憩いの散歩道であり、または思索の隘路でもあろう。

「郷土研究の第一義は、手短かに言うならば平民の過去を知ることである。…平民の今までに通って来た路を知ることとは、われわれ平民から言へば自ら知ることであり、即ち反省である。」

(「郷土生活の研究法」)